

ニケア信条講話（1）

『我は信ず、唯一の神、全能の父』

- ①. 【神は知ることはできないこと。預言者・使徒・福音記者が伝授しなかったものを探究してはいけないこと。神を求める姿勢。】

神を知る方法には、普通二つの方法があります。

第一は、自然界を観察して「神は～のような方である」という結論に至る道です。これは汎神論の世界であり、下から上へ登ってゆく考え方です。

第二の方法は、啓示によって「神は～である」と信じる道であり、上から下へと降ってくる考え方です。キリスト教は、後者の立場を取ります。

神はすべての存在を越えています。存在を越えている者を知ることはできないのです。なぜなら認識は、存在物に関わることだからです。仮に、神を知ったとしても、それは神自身を知ったのではなく、それより劣る何か、一私たちの能力で知ることのできるもの—を知ったにすぎないのです。故に、神を知るためには、《分かる（＝高慢）》という心を捨てて謙虚にならねばなりません。あまりに光が強いと視覚が失われるように被造物の知識が過剰になると、神に達するための唯一の道である《無知＝謙虚》が失われるからです。

●『神は、知ることが我々の益となることは示されたが、我々に耐えられないことは秘密にされたのである。示されたことで我々は満足し、それらのことの内に留まり、昔からの領域を移さず、神聖なる伝承を踏み越えることはするまい。』
(7世紀ダマスコのヨハネ)

●『神的なものは無限であり、理解できません。私たちに唯一理解できることがあるとすれば、それは神が無限であり、理解を超えるものであるということだけです。神に関する積極的な表現はすべて、神の本性そのものではなく、その本性の周辺的なことがらを示すにすぎないのです。神が諸存在者のうちの何者でもないということは、神が「存在」でないということの意味しません。むしろそれは神があらゆる存在者、そして存在すらも超えていることを意味するのです。…あらゆる認識を超えたかなたに存在する者は、同時にあらゆる本質を超えています。逆に、あらゆる本質を超えている者は、あらゆる認識をも超えているのです。』

(7世紀ダマスコのヨハネ)

・「いまだかつて、神を見た者はものはいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。」(ヨハネ1：18)

・「子と、子が示そうと思う者のほかには、父を知る者はいません。」

(ヨハネ11：27)

・「神の霊以外に神のことを知る者はいません。」(Iコリント2：11)

・「神は、祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、唯一の不死の存在、近寄り難い光の中に住まわれる方、だれ一人見たことがなく、見ることのできない方です。」(Iテモテ6：15～16)

御子イエス・キリストと聖霊によって示された神を、教会は信じます。それ以外の啓示や人間的な思索は信じません。

②. 【神の存在証明・神は唯一であること】

神に関しては[無神論][多神論][一神論]という考え方があります。

[無神論]は《無支配》であり《無秩序》になります。[多神論]は《多支配》であり、対立を生み、やがて《無秩序》になります。《無秩序》は《解体》してしまいます。故に[一神論]だけが安定しています。仮に、多くの神々が、部分支配をしていると主張するならば、それを割り当て、秩序づけたのは誰か？これこそ神にほかならない。

[多神論者]に対しては「神は完全か、不完全か？」と問います。普通は「神は完全だ」と答えるでしょう。完全とは100%であって、神の様々な性質(一愛・聖・力・知など)も100%になります。すると多くの神々の間の違いが無くなり、神は唯一としか告白できなくなります。もし、違いがあれば、それはもはや完全者ではなく、神でもない者となるでしょう。

(a) [宗教心からの啓示]

神を知らない民は多くても、神に対する信仰を持たない民はいない。神が実際になら、なぜ『神』という言葉が生まれたのか。

(b) [道徳心からの啓示]

善を喜び、悪を憎む良心がすべての人間にある。良心が、もし人間の意志ならば、自分にできないことを命じないはずである。良心が人間に命じているのであって、人間が良心に命じているのではない。良心は人間

が造った者ではなく、人間以上の者が与えたものである。良心は、正義の審判者の存在を暗示している。

(c) [自然界からの啓示]

静止状態に運動を与えた者は、誰だろうか！自然界に秩序を与えた者は、誰だろうか！

(d) [聖書による啓示]

- ・「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。」(申命記6：4)
- ・「私こそ主、私の前に神は造られず、私の後にも存在しないことを。私、私が主である。私のほかに救い主はいない。」(イザヤ43：10～11)
- ・「私は初めであり、終わりである。私をおいて神はない。」
(イザヤ44：6)
- ・「永遠の命とは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」(ヨハネ17：3)

③. 【神の無限性について】

有限なものは、無限なるものを知り尽くすことはできません。

(a) [神の自存性について]

神は、他の何物からも生まれず、造られず、存在の原因を自らの内にもっています。「～がいなければ、～がなければ存在できず、神にならない」というものではありません。他者に全く依存していません。神は時間と場所、環境などの条件に縛られない方です。

- ・「神はモーセに、『私はある。私はある、という者だ』と言われ…」
(出エジプト3：14)
- ・「何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もありません。すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えて下さるのは、この神だからです。」(使徒言行17：25)

(b) [神の不変性について]

神には、変化すること、すなわち(進歩・成長)や(後退・忘却)などはありません。なぜなら、このどちらも不完全な状態だからです。被造世界を創造しても、神様の性質に何ら変化はないのです。

- ・「御父には、移り変わりも、天体の動きにつれて生じる陰もありません。」(ヤコブ1：17)

(c) [神の永遠性について]

神には、その始まりも終わりもなく、誕生も死も無いので、永遠なお方です。実に《永遠》とは、神にしか用いられない言葉です。私たちすべての被造物は《時間》の内にあるのです。永遠とは時間の延長ではありません。時間は、やがて終わりますが、永遠は終わりがありません。

・「山々が生まれる前から、大地が、人の世が、生み出される前から、世よとこしえに、あなたは神。」(詩篇90：2)

(d) [神の偏在性について]

・「どこに行けば、あなたの霊から離れることができよう。どこに逃れば、御顔を避けることができよう。天に登ろうとも、あなたはそこにいまし、陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにいます。…」(詩篇139：7～8)

・「神は霊である。」(ヨハネ4：25)

・「どこにも主の目は注がれ、善人をも悪人をも見ておられる。」

(箴言15：3)

神がどこにでもおられるということは、「物」の長さ、広さ、高さ、深さ＝場所を超えておられるということです。

●『神が至る所におられることは我々は知っている。が、いかなる様子でおられるかは我々には解らない。我々には、神の本体そのものが解らないから、従ってその偏在される様子も解るはずがない。』

(4世紀のクリュソストモス)

●『神はいかなる場所にも閉じ込められない。またいかなる場所からもはぶかれぬ。神は全身をもって全ての中にあり、全ての外にありまた、全てを超越してある。』

③. 【神の靈的完全性について】

(a) [神の全知]

・「神は、私たちの心よりも大きく、すべてをご存じだからです。」

(1ヨハネ3：20)

・「主よ、あなたは私を究め、私を知っておられる。座るのも立つのも

知り、遠くから私の計らいを悟っておられる。…私の舌がまだひと
言も語らぬさきに、主よ、あなたはすべてを知っておられる。」

(詩篇139：1～4)

神の全知とは、神の知識の深さと広さの完全さをいいます。神が全知
でないならば、とうてい正しい審判はできないでしょう。

●《神の予知と予定》—神が未来をあらかじめ知っておられることを予
知といいます。神は、予知はされますが、救われる人と滅びる人に、
あらかじめ人を定める(予定)ような不公平なことはされません。人間の自
由意志を認めておられます。神は予知されるが故に予定されます。

(b) [神の叡智]

- ・「英知をもって天を造った方に感謝せよ。」(詩篇136：5)
- ・「その英知は究めがたい。」(イザヤ40：28)
- ・「神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることが出来ます。」(ローマ1：20)

英知とは、最上の知恵のことをいいます。神の知恵は、自然界、宇宙
に現れています。それを知り尽くすことはできません。

(c) [神の自由]

神は決定や実行において他より何の刺激も強制も受けない自分の意志
によってのみ行動することができます。神は、完全な《自由》を持っ
ておられます。《自由》とは「～をする自由」と「～しない自由」がありま
す。

- ・「だれも私から命を奪い取ることはできない。私は自分でそれを捨てる。私は命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる」

(ヨハネ10：18)

- ・「主の霊のおられるところには自由があります。」

(Ⅱコリント3：17)

・「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。」(フィリピ2：6～7)

(d) [神の聖性]

- ・「あなたたちの神、主である私は聖なる者である。」(レビ19:2)
- ・「聖なる輝きに満ちる主にひれ伏せ。」(詩篇29:2)
- ・「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う」
(イザヤ6:3)

(e) [神の全能]

- ・「主が仰せになると、そのように成り、主が命じられると、そのように立つ。」(詩篇33:9)
- ・「神にできないことは何一つない。」(ルカ1:37)
- ・「私は全能の神である。」(創世記17:1)

神はご自分が望まれることは何でもすることができます。いかなる外部の力も神の行動を抑え、止めることはできません。ただし、全能とは単に何でも出来るという意味ではなく、神の意志にかなうことは何でも出来るという意味です。悪をすることは神の意志ではないので、悪をすることは出来ません。

(f) [神の正義]

- ・「神は人を分け隔てなさいません。」(ローマ2:11)
- ・「主は恵み深く正しくいまし、」(詩篇25:7)

神は自分自身、正義であるのみならず、理性的な知恵ある被造物からも正義を要求されます。神は、正義の制定者であり、正義の執行者でもあります。それならば、なぜ現世で矛盾があり、神は悪を放置しておかれるのでしょうか。なぜ、悪を裁かないのでしょうか。

●神が悪を速やかに滅ぼしたら、あなたも死ぬことになるでしょう。神は、あなたが悪に疲れ、苦しみ、善に帰ることを待っておられるからです。人は、いつ善人になるか分かりません。そのチャンスを奪ってはなりません。死の前に、悪人から善人になる者もいれば、善人から悪人になる者もいるのです。

- ・「私は悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ。」(エゼキエル18:23, 33:11)
- ・「毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで両方とも育つままにしておきなさい。」(マタイ13:29~30)

●病気を与えられることにより、人間はそこから癒された時、様々な、《善なる徳》を身につけることが出来ます。病気を見分ける力、正しい治療の仕方、与えられている健康に対する感謝、癒してくれた医者看護してくれた人に対する感謝、病に二度とかからないための身体の節制、管理、反省などです。一つの《病》という悪から、これほどの《善なる徳》が生まれるのです。神は、悪を滅ぼさないうで、それをを用いて、いつも《善なる徳》を生み出すことをされるのです。これは神の知恵にかなうことです。悪がこの世に入った以上、このような治療をされるのです。

- ・「主はサタンに言われた。それでは、彼の物を、一切、お前のいいようにしてみるがよい。ただし彼には、手を出すな。」(ヨブ 1 : 12)
- ・「主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。」
- ・「私たちは神から幸福をいただいたのだから、不幸をもいただくのではないか。」(ヨブ 1 : 21、2 : 10)
- ・「悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい」(ローマ 12 : 21)

(g) [神の福楽]

・「神は、祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、唯一の不死の存在、近寄り難い光の中に住まわれる方、だれ一人見たことがなく見ることのできない方です。」(Iテモテ 6 : 15~16)

(h) [神の愛]

- ・「神は愛です。」(Iヨハネ 4 : 16)
- ・「愛と平和の神があなたがたと共にいてくださいます。」
(Iコリント 13 : 11)
- ・「御父がどれほど私たちを愛してくださるか、考えなさい。」
(Iヨハネ 3 : 1)

(i) [神の善性]

- ・「善い方はおひとりである。」(ヨハネ 19 : 17)
- ・「あなたは善なる方、すべてを善とする方。」(詩篇 119 : 68)

神はあらゆる善の中の、最高の善であって、悪を行うことはありません。これは神の意志によるものであって、他からの強制によるものではありません。

(j) [神の慈しみ・憐れみ・忍耐・寛容]

・「主は憐れみ深く、恵みに富み、忍耐強く、慈しみは大きい。永久に責めることはなく、とこしえに怒り続けられることはない。」

(詩篇103：8～9)

・「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべき者を罰せずにはおかず、父祖の罪を、子、孫に三代、四代までも問う者。」

(出エジプト34：6～7)

・「わたしたちの主の忍耐深さを、救いと考えなさい。」

(Ⅱペトロ3：15)